

☆年間第19主日(8月9日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読 (列王記 19章 9a, 11~13a 節)

その日、エリヤは神の山ホレブに着き、そこにあった洞穴に入り、夜を過ごした。主は、「そこを出て、山の中で主の前に立ちなさい」と言われた。見よ、そのとき主が通り過ぎて行かれた。主の御前には非常に激しい風が起こり、山を裂き、岩を砕いた。しかし、風の中に主はおられなかった。風の後には地震が起こった。しかし、地震の中にも主はおられなかった。地震の後には火が起こった。しかし、火の中にも主はおられなかった。火の後に、静かにささやく声が聞こえた。それを聞くと、エリヤは外套で顔を覆い、出て来て、洞穴の入り口に立った。

第二朗読 (使徒パウロのローマの教会への手紙 9章 1~5 節)

皆さん、わたしはキリストに結ばれた者として真実を語り、偽りは言わない。わたしの良心も聖霊によって証ししていることですが、わたしには深い悲しみがあり、わたしの心には絶え間ない痛みがあります。わたし自身、兄弟たち、つまり肉による同胞のためならば、キリストから離され、神から見捨てられた者となってもよいとさえ思っています。彼らはイスラエルの民です。神の子としての身分、栄光、契約、律法、礼拝、約束は彼らのものです。先祖たちも彼らのものであり、肉によればキリストも彼らから出られたのです。キリストは、万物の上におられる、永遠にほめたたえられる神、アーメン。

福音朗読 (マタイによる福音書 14章 22～33節)

人々がパンを食べて満足した後、イエスは弟子たちを強いて舟に乗せ、向こう岸へ先に行かせ、その間に群衆を解散させられた。群衆を解散させてから、祈るためにひとり山にお登りになった。夕方になっても、ただひとりそこにおられた。ところが、舟は既に陸から何スタディオンか離れており、逆風のために波に悩まされていた。夜が明けるところ、イエスは湖の上を歩いて弟子たちのところに行かれた。弟子たちは、イエスが湖上を歩いておられるのを見て、「幽霊だ」と言っておびえ、恐怖のあまり叫び声をあげた。イエスはすぐ彼らに話しかけられた。「安心なさい。わたしだ。恐れることはない。」すると、ペトロが答えた。「主よ、あなたでしたら、わたしに命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください。」イエスが「来なさい」と言われたので、ペトロは舟から降りて水の上を歩き、イエスの方へ進んだ。しかし、強い風に気がついて怖くなり、沈みかけたので、「主よ、助けてください」と叫んだ。イエスはすぐに手を伸ばして捕まえ、「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」と言われた。そして、二人が舟に乗り込むと、風は静まった。舟の中にいた人たちは、「本当に、あなたは神の子です」と言ってイエスを拝んだ。

朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

皆様おはようございます。今日は75年前に長崎に原爆が落とされた日です。多くの信徒の皆様が犠牲となりました。爆心地に近い浦上教会の信徒の方々です。中学生のころ長崎の姉の家に遊びに行つて8月15日の夕方、浦上教会のたいまつ行列に参加した記憶があります。犠牲となった方々のために、また今も後遺症に苦しんでおられる方々のために祈りたいと思っています。8月の6日から15日まで、日本の教会は「平和旬間」に定められています。武力競争や人権抑圧の激しい圧力が広がっている現在、平和とは何かを考え、そのために祈り動くことが必要です。

第一朗読 (列王記 19章 9a, 11~13a 節)

この個所は神との出会いの在り方として有名なところですが、神は私たちにそれとわかる方法でなく、密やかな形で表れてくださるのです。そのためには私たちに静かな心と研ぎ澄まされた霊の動きが必要だと教えています。私たちはよくはっきりとした印を求めがちですが、それは激しい風や地震や火山の爆発とか大火事などのようなもので、そこには神の現れはないというのです。今地球上では温暖化の影響でしょうか自然災害が多発しています。私たちはそのひどさに目を奪われがちですが、その中に隠されている神からのメッセージを読み取るためには心を静かにする必要があります。

第二朗読 (使徒パウロのローマの教会への手紙 9章 1~5 節)

パウロは旧約の律法に縛られ、イエス・キリストによる救いの実現を受け入れようとしなないユダヤ人のために嘆いています。パウロは何としてでもイエスによる救いをユダヤ人たちに受け入れてもらいたいと心から望み、そのためには自分が「キリストから離され、神から見捨てられた者ともなってもよい」とさえ思っているのです。それほど多くのユダヤ人たちをキリストのもとに導きたかったのです。それは、彼らは「神の民」であり、肉によれば「キリストも彼らから出られた」からです。これほど血筋の優秀な民、ユダヤ人がかたくなにキリストを拒んでいることに齒がゆい思いをしているのです。ですから律法を守っているだけでは救いに至ることはなく、神からの恵みによって救いに導かれるとパウロは訴えるのです。私の信仰も自分の努力ではなく神からの恵みとして大切に守り生きていきましょう。

福音朗読 (マタイによる福音書 14章 22～33節)

今日の福音は夏にふさわしい湖の話です。イエスの弟子たちの中には漁師たちが何人もいました。漁師ですから湖のことはよく知っていたでしょうが、泳ぎは上手ではなかったようです。今の帆船のように逆風でも前に進む技術はなかったので、逆風では大変困ったのです。マタイがこの福音書を書いた時はキリストの教会がある程度形作られていたころで、その教会の発展についても暗示しています。迫害が起こり、荒波にもまれ神に助けを求める教会の姿です。イエスが救い主キリストであると宣教する教会は多くの妨害に会います。その時に私たちはどうするのでしょうか。一度立ち上がったペトロのように、沈みかけて救いを求める姿は、いつの時代も教会の姿があります。イエスはその教会に向かって「安心しなさい。私だ。恐れることはない」と呼び掛けられるのです。「誰でもない、この私だよ。」この言葉こそ私たちの救いなのです。キリスト・イエスが共にいてくださること以上に救いはないのです。コロナ感染症以上の恐るべきことは、神を必要としない考えです。私たちが神を必要としない時でも、逆説的ですが神は私たちが必要としておられるのです。神は私たちに対する選びに忠実な方だからです。

亡くなった方々特に家族の先祖の方々を思い起こす季節です。命をはぐくんでくださった方々、特に信仰を伝えてくださった方々を思い起こし感謝を表しましょう。

カトリック足立教会
主任司祭 野口重光